

相変わらず身勝手な人へ

興津陽子
静岡県・四三・事務員

◎◎◎優秀賞

拝復 お手紙いただきました。

半年前に、高校生の息子さんをつれて二〇年の結婚生活を解消なさったとのこと、驚きとともに読ませていただきました。

この二〇数年、折にふれ、チクリとした痛みとともにあなたのことが胸をかすめることはありました。でもそれも次第に生活にとり紛れ、最近ではたして現実にあつたかどうかとも定かでない遠い思い出のようでした。

あなたのお手紙は、そんな私の気持ちをいっぺんにあの頃に引き戻してくれました。二〇歳そこそこの若かった頃、楽しかった日々、まつすぐなあなたへの気持ち、結婚の約束。

——それを破ったのはあなたです。あの数か月、明日は電話があるかもしれない、次の週末は訪ねてくれるかもしれないとあなたを待ちながら、息をつめるように暮らした日々を私は決して忘れることができません。そして、あなたが私を迎えに来ることも、電話も、もう決してないのだと知った時の絶望感、そこから立ち直るまでの永い歲月——。

ご免なさいね。私は恨み事を言いたいのではないのです。ただ手紙で「会いたい」と言ってくれたあなたが嬉しく懐かしかったと同時に、相変わらず身勝手な人、との印象を持ってしまったことも事実です。

私は今、静かに幸せです。主人には激しい恋愛感情はなかったけれど、年月を経て地味な、でも本当の愛を育てて来たと思います。いつか死ぬ

までに「若い頃、とても好きだった人がいたのよ」とあなたのことも話せたらいいなと思います。

二十数年ぶりのラブ・レターの返事としてはいたわりのない、冷たいものになってしまったかと思いますが、私の正直な気持ちです。許して下さい。

末筆ながらお身体御大切に。お幸せを祈ります。

敬具